

パーソナルアシスタント町田通信コラム

<第102回>ALSと共に生きて考える : □ 終わりに 二つの転機

私のこれまで生きてきた 84 年間のあいだには、2 回の人生の転機がありました。

一度目は 1945 年 8 月 15 日の敗戦でした。それはそれまで 15 年間に渡って天皇制の下で受けてきた軍国主義の世界観と決別する転換点でした。私は私の「生きる力」を初めて自分の思考で、その方向を決めたのです。そして日本と世界への歴史認識を改め、今日まで私は自分が選んだ道を歩いてきたつもりです。職業としてジャーナリズムの道を選んだのもその延長線上でした。何度か命を危険に晒すこともありました。そして私は 21 世紀の世界に希望を抱きました。しかし残念ながら、戦争は続発し紛争も後を絶ちません。

二度目の転機は ALS との出会いの時でした。この病は身体の機能を奪い仕事も社会生活も奪い取る残酷なものですが、決して恐ろしい病気ではありません。心や精神の自由は侵されませんでしたし、むしろ「生きる力」に試練を与えてくれました。これからは障害者や社会的弱者の観点に立っての認識や発想を強めねばと思っています。これからの第二の人生は、家族、医療機関の医師、看護師、ヘルパーさん、また日本 ALS 協会に結集する患者家族の「生きる力」と一緒に、ALS と闘い共に歩み続けます。これまで生きてきた 20 数年の間に私は沢山の人々に励まされてきました。何と幸せ者だろうと思います。

私の好きな言葉に“アレグロコンブリオ”という音楽用語があります「勇気を持って元気良く」と言う意味です。

この年になると氷水を被る勇気はありませんが、まだ、少しは勇気を出して仕事をしたいと思っています。

長い間お付き合いいただき心から感謝します。

ありがとうございました。

< 筆者紹介 >

全8回にわたり連載した「ALSと共に生きて考える」は如何でしたでしょうか？最後に筆者の鈴木利一さんを紹介させていただきます。

本文中でも触れられていますが、鈴木さんは以前もALSの人となった現在もジャーナリストです。ベトナム戦争当時に日本電波ニュース社のハノイ支局を立ち上げ、支局長をされていました。そこで行った仕事はベトナム戦争を終結させる“きっかけ”になりました。米国は当時、軍事施設のみを攻撃していると主張していました。しかし、“米軍によるハノイ市への無差別爆撃で多数の民間人が犠牲になっている映像”を鈴木さんが撮影し発表しました。この映像で事実を知った米国民に反戦運動が巻き起こり戦争は終結に向かいました。戦争の報道への規制は当時からありました。また、映像の発表に関連した米国からの圧力も様々にあったそうです。映像を日本に持ち帰ろうとした同僚が麻薬所持の嫌疑でフィルムを没収されそうになったことや、日本での発表時に駐日大使がテレビ局に抗議に来たことなどです。そんな状況でも鈴木さん本人は「映像発表は日本への帰国後だったので命の危険までは感じなかった」と仰っていました。また、ベトナム戦争が終結したのは自分の業績ではなく、多くのジャーナリストが戦場に立ち続けていたためだと仰います。

連載の後に筆者の鈴木さんを紹介したのは、連載の前に紹介をしてしまうと「ALSと共に生きて考える」ことができるのは「鈴木さんだから」と受け取られることを避けたかったからです。鈴木さん本人も自分を特殊な人とは思っていません。ALSの患者さんを力づけることができるのはALSの患者さんだとも仰っています。

そんな鈴木さんの強調される弱者の「生きる力」が、肯定され称賛される社会になってほしいものです。(TK)